

新約聖書 ルカによる福音書 11章1節—13節 (新共同訳)

¹ イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。² そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、／御名が崇められますように。御国が来ますように。³ わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。⁴ わたしたちの罪を赦してください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

⁵ また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がい、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。⁶ 旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』⁷ すると、その人は家の中から答えるにちがいない。

『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』⁸ しかし、言うておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。⁹ そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。¹⁰ だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。¹¹ あなたがたの中に、魚を欲しがると子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。¹² また、卵を欲しがると、さそりを与える父親がいるだろうか。¹³ このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。』

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「祈るときには」

本日の福音書は、「イエスはある所で祈っておられた」というイエス自身の祈りの姿が記されている場面から始まります(ルカ11:1)。

イエスの祈りが終わると、弟子の一人がイエスにこう言いました。「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」(ルカ11:1)。

弟子たちは、皆ユダヤ人です。ユダヤ人は幼い頃から、聖書を読むことと祈ることを学んでいます。その彼らが、祈りを教えてくださいとイエスに願ったのです。そこには、ユダヤ人としての伝統的な祈りを越えて、キリストの弟子、キリストに従う者、としての祈りを教わりたいとの気持ちが込められています。

弟子たちの願いを受けて、イエスは、のちに「主の祈り」と呼ばれる祈りを、弟子たちに伝えました。イエスの祈りは「父よ」から始まります(ルカ11:2)。ここでの「父」はアラム語で「アッパ」と言います。「アッパ」とは、子供が父親を呼ぶ時の言葉で、「お父ちゃん」という響きがあります。

神に向かって、前置きなしに「アッバ」と信頼を込めて呼びかけるイエスの姿は、弟子たちにとってインパクトのあるものだったのではないのでしょうか。弟子たちは、イエスと神との間の近しさを感じ、幼子が父を愛し信頼しきっているように、イエスが神を愛し全幅の信頼を置いている姿に接し、自分たちもイエスのように祈りたいと願ったことでしょう。

祈りは、父なる神との出会いの時です。自分の命を造ったお方と出会い、その方を「父よ」と呼ぶことができる。それは、神の子としての人間の姿が与えられ、新しい命が与えられることです。

イエスはご自分と同じように、私たちが神を「父よ（アッバ）」と呼ぶことを願っているのです。

続いてイエスは、真夜中にパンを願う人のたとえを語り、祈り求めることの重要性を告げます（ルカ 11:5-8）。

ここでは一貫して、願いとしての祈りが語られています。イエスが教えた「主の祈り」の内容も、全て願いです。祈るとは、何よりもまず神に願うことです。

それと同時に、祈りが感謝であり、賛美であることも確かです。自分の願いがその通りになるかどうかに関わらず、神からの賜物に感謝しつつ祈るのが、祈りの心です。

しかしそれでもなお、私たちがイエスによって気付かされることは、祈りがひたすら願いであるということです。

このイエスのたとえに登場する、訪ねてきた友人に食べさせるパンがなく、夜中にパンを三つ貸してくださいと頼んだ人は、自分が食べるパンもなかったということでしょう。自分が食べるものもないのに、人の世話をするのは無謀だと思われるかもしれません。しかし、人が人を愛する時、人はそのような無謀とも言える行動へと突き動かされていくのではないのでしょうか。

私たちが自分の心の貧しさを思い知らされるのは、隣人に愛を与えなければならないところで、その愛がない時です。赦しにおいてもそうです。人を赦そうと思っても赦せないところでこそ、自分の心の狭さと愛の不足を思い知らされます。このたとえの中で言われているパンとは、肉体の飢えを満たすパンであると同時に、隣人に与えるべきパン、赦しのパンとすることができます。そのパンを、私たち人間が自分の意志によって持つことはなかなか難しいでしょう。

ですが、そういう時に主イエスは、私たちに欠けているものを、神に願うようにと教えます。自分にはないものは与えられない、と諦めるのではなく、自分にはないそれをどうぞ与えてください、と祈るのです。その時、その祈りは必ず聞かれると、主イエス・キリストは約束します。

そしてイエスは、「友達だからということでは」願いを聞き入れてくれなくても、「しつように頼めば」聞き入れてくれることを、弟子たちに教えました（ルカ 11:8）。

この「友達だからということでは」という言葉は、奥が深いです。「友達だから与えてくれて当然」なのではありません。相手との関係性に甘んじるのではなく、願いを叶えてもらうためには「しつように頼む」ことが大事だということです。

マタイ福音書 6:8 にあるように、神は私たちが願う前から、私たちに必要なものをご存知でいてくださいます。そして、願わなくても多くの必要なものを与えてくださっています。ですが同時に、私たちが自分の口で、言葉で、はっきりと必要なものを願い、意思表示することを、神は求めているのです。

「しつように頼めば」と翻訳されている言葉（アナイディア）は、もともと、「恥知らず」という意味の言葉です。一つには、恥知らずなほどに熱心に願う、厚顔無恥な願いを続ける、という意味になります。

イエスはこう言います。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」（ルカ 11:9）。

「探す」とは、自分の欲しいものを探すのでなく、神を探し求めるのです。神は、ご自分を探し求める者に、必ずご自身を示してくださるからです。神を探し求めるとは、すなわち祈ることです。求めることも、探すことも、門を叩くことも、すべて祈りです。

祈りとは、静かに目を閉じて行うものというイメージがあると思いますが、必ずしもそうではありません。行動が、祈りとなることもあるのです。

そして私たちは、人生において、ただ行動するというよりも、祈りを込めた行動をすることが大切なのだと思います。

祈りを込めて求め、祈りを込めて探し、祈りを込めて門をたたくのです。

主イエス・キリストは、私たちにこう約束してくださいました。

「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」（ルカ 11:10）。

この御言葉をいつも心に覚えながら、私たちは自分自身と隣人を愛し、希望と喜びをもって共に歩いていきましょう。

お祈りをいたします。

全能の父なる神様。私たちがあなたに従う者として、日々の生活の中で求め、探し、門を叩いて生きていくことができるようにしてください。あなたに全幅の信頼をおき、私たちが喜びと感謝のうちに歩いていくことができますように。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 創世記 18章 20節—32節（新共同訳）

²⁰主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。²¹わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。」²²その人たちは、更にソドムの方へ向かったが、アブラハムはなお、主の御前にいた。²³アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。²⁴あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。²⁵正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」²⁶主は言われた。「もしソドムの町に正しい者が五十人いるならば、その者たちのために、町全部を赦そう。」²⁷アブラハムは答えた。「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。²⁸もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたは、五人足りないために、町のすべてを滅ぼされますか。」主は言われた。「もし、四十五人いれば滅ぼさない。」²⁹アブラハムは重ねて言った。「もしかすると、四十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その四十人のためにわたしはそれをしない。」³⁰アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう少し言わせてください。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「もし三十人いるならわたしはそれをしない。」³¹アブラハムは言った。「あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、二十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その二十人のためにわたしは滅ぼさない。」³²アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その十人のためにわたしは滅ぼさない。」

新約聖書 コロサイの信徒への手紙 2章 6節—15節（新共同訳）

⁶あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。⁷キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい。⁸人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。⁹キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っており、¹⁰あなたがたは、キリストにおいて満たされているのです。キリストはすべての支配や権威の頭です。¹¹あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、¹²洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。¹³肉に割礼を受けず、罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださったのです。神は、わたしたちの一切の罪を赦し、¹⁴規則によってわたしたちを訴えて不利に陥っていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。¹⁵そして、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました。

教会讃美歌 151番「ひとの目には」、190番「主のみ名によりて」、250番「つくられしものよ」、375番「神の息よ」。